

題目 「社会学における非行・逸脱研究の思潮についての一考察—ボンド理論を中心に—」

指導教員 山口健二

発表者 山本優

I. 題目設定の理由

人はなぜ逸脱するのか、なぜ非行に走るのか、逸脱する人とならない人にどのような違いがあるのか、といったことについて常々疑問を抱いていた。社会学の非行・逸脱に関する先行研究を学んでいく際に、「人はなぜ逸脱するのか」ではなく「人はなぜ逸脱しないのか」という、私とは逆の視点から逸脱を捉え、考えているボンド理論に興味をもち、これを用いて非行・逸脱についてみていきたいと思い、本題目を設定した。

II. 論文構成

第1章 非行・逸脱研究における実証主義	第3章 ボンド理論を用いた実証研究
第1節 デュルケムの自殺論	第1節 愛着 (Attachment)、投資 (Commitment) に着目して
第2節 マートンの準拠集団論	第2節 巻き込み (Involvement)、規範観念 (Blief) に着目して
第2章 ハーシのボンド理論	第4章 考察
第1節 ボンド理論のできた経緯	第1節 変数化と測定
第2節 ボンド理論の概要	第2節 理論の充実
第3節 ハーシの実証研究	

III. 論文内容

< 第1章 非行・逸脱研究における実証主義 >

本章では、非行・逸脱における先行研究について述べた。第1節では、デュルケムの自殺論について述べた。デュルケムはフランスの社会学者で、実証主義の祖とも言われている。そのデュルケムの代表作である『自殺論』について論述した。19世紀後半のヨーロッパでは自殺率が急上昇した。デュルケムは、自殺というものを人間の行動や思考は個人を超越した集団や社会のしきたり、慣習などによって支配されるという社会事実を客観的かつ実証的に分析し、その実態を具体的な事例によって明らかにした。第2節ではマートンの準拠集団論について述べた。マートンはアメリカの社会学者で、主な業績として予言の自己成就、アノミー論、準拠集団論が挙げられるが、その中でも準拠集団論に焦点を当てて論述した。準拠集団とは、人の価値観、信念、態度、行動などに強い影響を与える集団のことで、マートンは比較的準拠集団と規範的準拠集団に区別をし、準拠集団の概念を体系的に整備した。

< 第2章 ハーシのボンド理論 >

本章では、題目の副題にもある、アメリカの社会学者のハーシの提唱したボンド理論についてみていく。第1節では、ボンド理論の経緯について述べた。ボンド理論が言われる直前の1960年代70年代のアメリカでは、犯罪の本質は、法を犯すという「行為」にあるのではなく、人々が定義づける社会的な定義づけの「過程」にあるとするラベリング理論が優勢であった。第2節では、ボンド理論の概要について述べた。ハーシは非行に関する分析視点として、3つの立場があると考えた。緊張理論（または動機づけ理論）、ボンド理論、分化的逸脱理論の3つである。ボンド理論というの

は「人はなぜ逸脱しないのか」という考えをし、逸脱しない理由を社会との絆に求めた。その絆（ボンド）を愛着（Attachment）、投資（Commitment）、巻き込み（Involvement）、規範観念（Belief）の4種類に分類した。第3節では、ボンド理論を実証するためにハーシが行った調査に関して述べた。方法としては、数字や言葉を書き込む箇所は何か所かあるものの、それ以外ほとんどの項目が選択肢のあるものでマーク式である。対象は、アメリカのリッチモンド地区に住むカリフォルニア大学に在学中の学生である。質問の数は、例も含んではいるが、80問×6の480問ある。質問項目は、愛着に関するものは学校や先生、親をどう思っているのか、また何かしら自分にマイナスな出来事が降りかかったときには親がどう思うだろうかということ、投資に関するものは、将来や未来といった、仮定に基づいた想像について、巻き込みに関するものは、どのようなことにどれくらい時間を費やしているのかについて、規範観念に関するものは、罪だと思われる行為に対してどう思っているのか、どの程度まで許容するのかということと、自己申告非行の有無について、それぞれ尋ねている。

<第3章 ボンド理論を用いた実証研究>

第3章では、ボンド理論を用いた実証研究を紹介した。ボンド理論を用いた実証研究は、多くあるため、2つのグループに分けて考えてみる。ボンド理論で言われている4種類の社会的絆のうち、第1節では主に愛着（Attachment）と投資（Commitment）に着目している論文を3本、第2節では主に巻き込み（Involvement）と規範観念（Belief）に着目している論文を2本、それぞれ紹介した。取り上げた5本の論文のうち、私が特に面白いと感じたのは山本功の書いた「高校生のアルバイトは非行を抑止するか」という論文である。

<第4章 考察>

本章では、第3章で紹介した論文の考察を行った。第1節では変数化と測定という視点から考察した。調査をする際には、どの絆がどの程度強いのかということをはかり、その結果を分析していく。しかし、絆というのは目に見えるものではないため測定しづらい。そこで、行った調査のどの質問項目がどの絆と繋がりがあり、どう変数化されているのか、ということ、第1節の変数化と測定では注目した。第2節では理論の充実という視点から考察した。規範観念（Belief）に関して考えていくと、サザーランドの分化的接触理論と密接な関係があると考えた。ボンド理論と分化的接触理論、分化的接触理論を基に考えられた分化的強化理論、社会学習理論なども絡めて考えていくべきだ、ということ述べた。

本論文を書くことにより、変数化で測定をすれば、より明確に絆の深さ、強さについてみることができるか、また、ボンド理論だけではなく他の理論と絡めて考えていくことにより、より多面的に非行・逸脱といった行為について考えられると考えた。これから先、主にこれら2点に関して考察を重ねていき、非行・逸脱の原因について追究していきたい。

IV.主要参考文献

T.ハーシ著 森田洋司・清水新二監訳『非行の原因 家庭・学校・社会のつながりを求めて』文化書房博文社 1995年

北澤毅編著 広田照幸監修『リーディングス日本の教育と社会9 非行・少年犯罪』日本図書センター 2007年第1版